へいせい ねん だい ごうそんがいばいしょうとうせいきゅう じけん
平成15年(ワ)第21846号損害賠償等請求事件

げんこく さとう たきさぶろう ほか めい
原告 佐藤瀧三郎 外1名

ひこく しゃかいふくしほうじんとうきょうとしゃかいふくし じぎょうだん ほか めい
被告 社会福祉法人 東京都 社会福祉事業団 外1名

とう べん しょ
答 弁 書

へいせい ねんじゅういちがつむいか
平成15年 11月 6日

とうきょう ちほうさいばんしよみんじだい と ごうぎ がかり おんちゅう
東京 地方裁判所民事第14都合議ろB係 御中

〒104-0061 とうきょうとちゅうおうくぎんざ ちょうめ ばん ごうにしやま かい
東京都 中央区銀座6丁目12番15号西山ビル5階

はっとりほうりつ じむしょ そうたつ ばしょ
服部法律事務所(送達場所)

でんわ
電話 03-3571-7823

FAX 03-3571-7825

ひこく
被告エイアイユーインシュアランスカンパニー

そしょうだいにん べんごし はっとり くにひこ
訴訟代理人弁護士 服部 邦彦

どう はなざき はまこ
同 花崎 浜子

せいきゅう しゆし たい とうべん
請求の趣旨に対する答弁

- げんこく ひこく たい せいきゅう
1 原告らの被告エイアイユーインシュアランスカンパニーに対する請求
をいずれも棄却する。
- そしょうひよう げんこく ふたん
2 訴訟費用は原告らの負担とする。

せいきゅう げんいん たい にんび
請求の原因に対する認否

だい せいきゅう げんいん だい とうじしゃ
第1 請求の原因「第1 当事者」について

- どうだい こう
1 同第1項について

(1) は、^{みと}認める。

(2) のうち、^{そがいさとうすすむ} 訴外佐藤 ^{いかに} 進 (以下「^{しやうわ} 訴外 ^{ねん} 進」という) が ^{しやうわ} 昭和 43 年 2 月 23 日 ^{にちうまれ} 日生 であること、「^{あい} 愛の手帳」3 度 ^{あひ} の知的 ^{ちてき} 障害 ^{しやうがい} をもつ ^{ひと} 人であったこと、^{そがいすすむ} 訴外 ^{ほっさ} 進には「^{てんかん} てんかん ^{ほっさ} 発作」がある ^と とされていたこと、^{どうじん} 同人 ^{がん} に ^{きゆうじやうてん} 眼 ^{しやうじやう} 球 ^{みと} 上 ^よ 転 ^{ふち} の ^{ひにん} 症状 ^が があったことは ^{みと} 認め、^よ その ^{ふち} 余 ^{ひにん} は ^は 不知 ^{また} または ^{ひにん} 否認 ^{する} する。

2 同第 2 項は、^{どうだい} 被告 ^{こう} 東京都 ^{ひこく} 社会 ^{とうきやう} 福祉 ^と 事業 ^{しやかい} 団 ^{ふくし} (以下「^{じぎやうだん} 被告 ^{いかに} 事業 ^{ひこく} 団」という) ^{いかに} に関する ^{じじつ} 事実 ^{ひこく} であり、^{いかに} 被告 ^{いかに} エイアイ ^{いかに} ユー ^{いかに} イン ^{いかに} シュア ^{いかに} ランス ^{いかに} カン ^{いかに} パニー (以下「^{いかに} 被告 ^{いかに} 保険 ^{いかに} 会社」という) は ^{いかに} 認 ^{いかに} 否 ^{いかに} し ^{いかに} ない。

3 同第 3 項について

(1) は、^{おおむ} 概 ^{みと} ね ^{みと} 認 ^{みと} める。

^{せいかに} 正確 ^{ひこく} には、^{ほけん} 被告 ^{いかに} 保険 ^{いかに} 会社 ^{いかに} (エイ ^{いかに} アイ ^{いかに} ユー ^{いかに} イン ^{いかに} シュア ^{いかに} ランス ^{いかに} カン ^{いかに} パニー) ^{ほんてん} は、^{がっしやうこく} 本店 ^{しやう} を ^{にほん} ア ^{えいぎやうしや} メ ^{とう} リ ^{とう} カ ^{とう} 合 ^{とう} 衆 ^{とう} 国 ^{とう} ニ ^{とう} ユー ^{とう} ヨーク ^{とう} 州 ^{とう} に、^{えいぎやうしや} 日本 ^{えいぎやうしや} にお ^{えいぎやうしや} ける ^{えいぎやうしや} 営 ^{えいぎやうしや} 業 ^{えいぎやうしや} 所 ^{えいぎやうしや} を ^{えいぎやうしや} 東 ^{えいぎやうしや} 京 ^{えいぎやうしや} 都 ^{えいぎやうしや} 千 ^{えいぎやうしや} 代 ^{えいぎやうしや} 田 ^{えいぎやうしや} 区 ^{えいぎやうしや} に ^{えいぎやうしや} 置 ^{えいぎやうしや} き、^{えいぎやうしや} 傷 ^{えいぎやうしや} 害 ^{えいぎやうしや} 保 ^{えいぎやうしや} 険 ^{えいぎやうしや} を ^{えいぎやうしや} 含 ^{えいぎやうしや} む ^{えいぎやうしや} 各 ^{えいぎやうしや} 種 ^{えいぎやうしや} 保 ^{えいぎやうしや} 険 ^{えいぎやうしや} 業 ^{えいぎやうしや} 務 ^{えいぎやうしや} を ^{えいぎやうしや} 取 ^{えいぎやうしや} り ^{えいぎやうしや} 扱 ^{えいぎやうしや} う ^{えいぎやうしや} 法 ^{えいぎやうしや} 人 ^{えいぎやうしや} で ^{えいぎやうしや} あ ^{えいぎやうしや} る。

(2) は、^{おおむ} 概 ^{みと} ね ^{みと} 認 ^{みと} める。

^{せいかに} 正確 ^{ほんけん} には、^{ほけん} 本 ^{けい} 件 ^{いかに} 保 ^{いかに} 険 ^{いかに} 契 ^{いかに} 約 ^{いかに} は、^{いかに} 契 ^{いかに} 約 ^{いかに} 者 ^{いかに} が ^{いかに} 七 ^{いかに} 生 ^{いかに} 福 ^{いかに} 祉 ^{いかに} 園 ^{いかに} 保 ^{いかに} 護 ^{いかに} 者 ^{いかに} 会 ^{いかに} 、^{いかに} 被 ^{いかに} 保 ^{いかに} 険 ^{いかに} 者 ^{いかに} が ^{いかに} 訴 ^{いかに} 外 ^{いかに} 進 ^{いかに} の ^{いかに} 団 ^{いかに} 体 ^{いかに} 契 ^{いかに} 約 ^{いかに} であり、^{いかに} 原 ^{いかに} 告 ^{いかに} 佐 ^{いかに} 藤 ^{いかに} 瀧 ^{いかに} 三 ^{いかに} 郎 ^{いかに} (以下「^{いかに} 原 ^{いかに} 告 ^{いかに} 父」という) ^{いかに} は ^{いかに} 加 ^{いかに} 入 ^{いかに} 者 ^{いかに} である。

第 2 請求の原因「第 2 本件死亡事故」について

^{ほんこうとうしや} 本 ^{ぎやう} 項 ^{じじつ} 頭 ^{みと} 書 ^は (2 行) の ^{みと} 事 ^{みと} 実 ^{みと} は、^{みと} 認 ^{みと} める。

1 同第 1 項について

^{げんこく} 原告 ^{なな} らが、^{なな} 七 ^{なな} 生 ^{なな} 福 ^{なな} 祉 ^{なな} 園 ^{なな} の ^{なな} 担 ^{なな} 当 ^{なな} 職 ^{なな} 員 ^{なな} から ^{なな} 直 ^{なな} 接 ^{なな} 話 ^{なな} を ^{なな} 聞 ^{なな} いて ^{なな} 事 ^{なな} 実 ^{なな} 確 ^{なな} 認 ^{なな} した ^{なな} 内 ^{なな} 容 ^{なな} 、^{なな} 及 ^{なな} び ^{なな} 原 ^{なな} 告 ^{なな} ら ^{なな} が ^{なな} 現 ^{なな} に ^{なな} 対 ^{なな} 応 ^{なな} した ^{なな} 内 ^{なな} 容 ^{なな} につ ^{なな} いて ^{なな} は、^{なな} 被 ^{なな} 告 ^{なな} 保 ^{なな} 険 ^{なな} 会 ^{なな} 社 ^{なな} は、^{なな} 不 ^{なな} 知 ^{なな} 。

2 同第 2 項について、被告保険会社は不知。

3 同第 3 項 (死亡の原因について) について

(1) は、^あ 争 ^あ わ ^あ ない。

(2) について

訴外進の死体検案書において、直接死因たる溺水吸引の原因について「てんかん発作時の意識障害」と記載されていること、被告保険会社が、死体検案書上、死亡原因がてんかん発作時の意識障害を原因とする溺水吸引による病死とされていること等を根拠として保険金の支払を拒絶したことは認めらるが、その余は、不知。

(3) について

被告保険会社は、訴外進には所謂「眼球上転」の症状が現れることがあったこと、同人が平成7年に桜ヶ丘記念病院に入院したこと、同人が「レボトミン」名の薬を継続的に服用していたことは認めらるが、その余は、不知(または否認する)。

4 同第4項(七生福祉園・同職員らの注意義務違反)について

(1) 及び(2) について、被告保険会社は不知。

(3) のうち、訴外進は知的障害をもっていたこと、過去に「てんかん」と診断されていたことがあったこと、継続して「レボトミン」を服用していたこと、同人には眼球上転発作が起こることがあったことは認めらるが、その余は、不知。

(4) において主張されている事実について、被告保険会社は不知。

(5) は、被告事業団の責任に対する主張であり、被告保険会社は認めらるしない。

第3 請求の原因「第3 損害の発生」について

訴外進の死亡により、同人に関する権利を原告らが相続したことは認めらるが、同人の死亡により生じた損害に関する主張は、全て不知。

第4 請求の原因「第4 被告保険会社に対する請求」について

1 同第1項(契約締結内容) については争わらない。

ただ せいかく ほんけん ほけんけいやく ほけんけいやくしゃ ななお ふくしえん ほんご
但し、正確には、本件保険契約における保険契約者は七生福祉園保護
しゃかい だんたいけいやく げんこくちち かにゆうしゃ
者会であり（団体契約）原告父は、加入者である。

ひ ほけんしゃ ほけん きかん しぼう ほけんきん しぼう ほけんきんうけとりじん そじょう きさい
被保険者、保険期間、死亡保険金、死亡保険金受取人は、訴状記載の
とおりである。

2 同第2項（進氏の死亡）は、認める。

3 同第3項（保険会社の対応）について

げんこくちち ひこく ほけん かいしゃ にたい ほんけん ほけん けいやく もと しぼう ほけんきん し
原告父が被告保険会社に対して本件保険契約に基づき死亡保険金の支
はらい せいきゅう ひこく ほけん かいしゃ きよぜつ みと
払を請求したこと、被告保険会社がこれを拒絶したことは認めるが、そ
きよぜつりゆう こうじゆつ しょうがいほけん ふつう ほけん やっかんだいしちじょうだい こう がいとう
の拒絶理由は、後述の傷害保険普通保険約款第1条第1項に該当する事
こ しゅべい ほっさ できぼつ
故がなく、また疾病であるてんかん発作により溺没されたものとする医
がくてきけんかい そんざい
学的見解が存在することによるものである。

4 同第4項（死亡保険金請求）は、不知または否認する。

だい せいきゅう げんいん だい そしょうまえ じょうきょう そうてん
第5 請求の原因「第5 訴訟前の状況・争点」について

1 同第1項は、不知。

2 同第2項は、正確ではない。被告会社の保険金支払拒絶理由は上記の

とおりである。

3 同第3項の第1段落及び第2段落は、不知。

だい だんらく ほんけん びょうし ななお ふくしえん しょくいん
第3段落における、本件は「病死」ではなく、七生福祉園の職員らに
かしつ じこし ごうりてき すいてい
おいて過失のある「事故死」だったものと合理的に推定されるのである

との主張は、否認する。

げんこく い じこし がいねん きわ ふめいかく
原告らの言う「事故死」とはいかなる概念であるのか、極めて不明確

である。

4 同第4項は、不知。

だい せいきゅう げんいん だい けつろん
第6 請求の原因「第6 結論」について

ひこく ほけん かいしゃ かん ぶぶん あらそ
被告保険会社に関する部分は、争う。

ひこく ほけん かいしゃ しゅちょう
被告保険会社の主張

1 本件の普通 傷害 保険契約に適用される 傷害 保険普通保険約款において
は、被保険者が「急激 かつ 偶然な 外来の事故」によって、その身体に 傷害
を被った場合に、保険会社はその 傷害 に対して、所定の保険金を支払うも
のとされている（同約款第 1 条 1 項）。

ここに言う「急激」性とは、事故が突発的に発生し、原因となった事故
から結果として 傷害 が発生するまでのプロセスが直接的で時間的間隔
がないことをいい、「偶然」性とは、被保険者にとって原因または結
果が予知できないこと、またそれらが被保険者の意思に基づかないこ
とをいう。

また、「外来」性とは、傷害の原因が被保険者の身体の外からの作用で
あることをいう。

このように、傷害 保険における保険金については、被保険者の受傷とい
う事実自体によって当然に同 請求 権が発生するのではなく、これに加えて、
当該 傷害 が急激・偶然・外来の三要件を充たした事故（保険事故）によっ
て生じた場合に、はじめて同 請求 権が発生する。

そして、上記三要件を充たした保険事故発生 of 具体的な主張 立証 義務に
ついては、保険金 請求 者がこれを負っていることが最高裁によって明確に
判示されている（最高 裁判所 平成 13 年 4 月 20 日判決）。

なお、同約款は、第 3 条 1 項において、被保険者の 傷害 が、当該条項に
定める(1)～(12)の事由によって生じた場合には保険会社は保険金を支払
わない旨を定め、その(5)には、「被保険者の脳疾患、疾病または心神喪
失」との規定がある。これは、上記三要件を充たした保険事故に該当せず、
保険金が支払われない場合を確認的注意的に規定したものである。

2 そこで本件についてみると、本件被保険者である訴外 進 の死体検案書に
よれば、同人の直接 死因は溺水 吸引 であり、これを惹起した原因は、てん
かん発作時の意識 障害 であると記載されている。そして、死因の種類とし

て、病死及び自然死の欄に が付されている。

上記事実によれば、訴外進は、入浴中にてんかん発作によって意識障害を来して顔面が水平に没してしまい、これによって溺水したものと認められる。死体検案医師が本件を病死としたのも、本件が、訴外進のてんかん発作という疾病に起因して発生したと判断したためであると解される。

とすれば、本件は、内因性のてんかん発作によって惹起されたものであり、本件は、保険事故の外来性の要件を欠くと言うべきである。

3 これに対し原告らは、本件は、訴外進が服用していた向精神薬「レボトミン」の副作用としての、眼球上転発作、パーキンソン症候群（動作緩慢になる）、注意力・反射神経の低下などにより、訴外進が浴槽内で転倒して湯船に沈み、即座にうまく起きあがれず、溺水し、死亡に至ったものと合理的に推定されると主張する。

しかしながら、一般論としても、普段どおりに入浴中に顔面を湯水に落したまま溺水死するというのは、特に転倒などを原因とする頭部打撲によって意識喪失に至ったという事情がない限り、それは、何らかの内因性の原因で身体を自由を失った結果であると推認せざるを得ないし、本件において、訴外進が浴室内で転倒して受傷したという事実は認め得ないのであるから、訴外進の溺死には外来性の要件を認めることはできない。

また、原告らは、「レボトミン」の副作用として眼球上転発作等が生じたことが本件の原因ではないかとの推論を展開しているが、仮にそうであれば、薬の副作用による発作それ自体がそもそも内因性のものなのであるから、やはり、当該発作を原因として惹起された本件事故には外来性が認められない。

よって、仮に原告主張によったとしても、本件は外来性の要件を欠いており、原告らには本件保険金請求権は発生しない。

4 さらに、原告らは、本件事故は、七生福祉園の職員らが、訴外進の入浴状況を10分程度の間隔で見に行くなどの注意を払っていれば防止するこ

とができたのであるから、本件は「病死」ではなく、七生福祉園の職員らにおいて過失のある「事故死」だったものと合理的に推定されると主張する。この主張の趣旨は必ずしも明確ではないが、そもそも傷害保険契約における保険会社の保険金支払義務の有無を判断する際には、現実発生した事故が、急激・偶然・外来の三要件を満たしているか否かが問題となるのであり、当該事故が発生してしまったことに関する第三者の過失の有無が、上記判断に影響を与える余地はない。

本件でいえば、訴外進が入浴中に水中に顔面を没して溺水したという事実（事故）につき、その事実が惹起された原因は何であったのかというところが問題となるのであって、七生福祉園の職員らの過失の有無によって、この判断が影響を受けることはあり得ない。

- 5 以上のとおりであり、本件事故については、いずれにしても外来性が認められないことが明らかであるから、被告保険会社は本件保険金支払義務を負わない。

てんぷ しよるい
添付書類

そしょういんにじょう
訴訟委任状

つつ
1通

いじょう
以上